

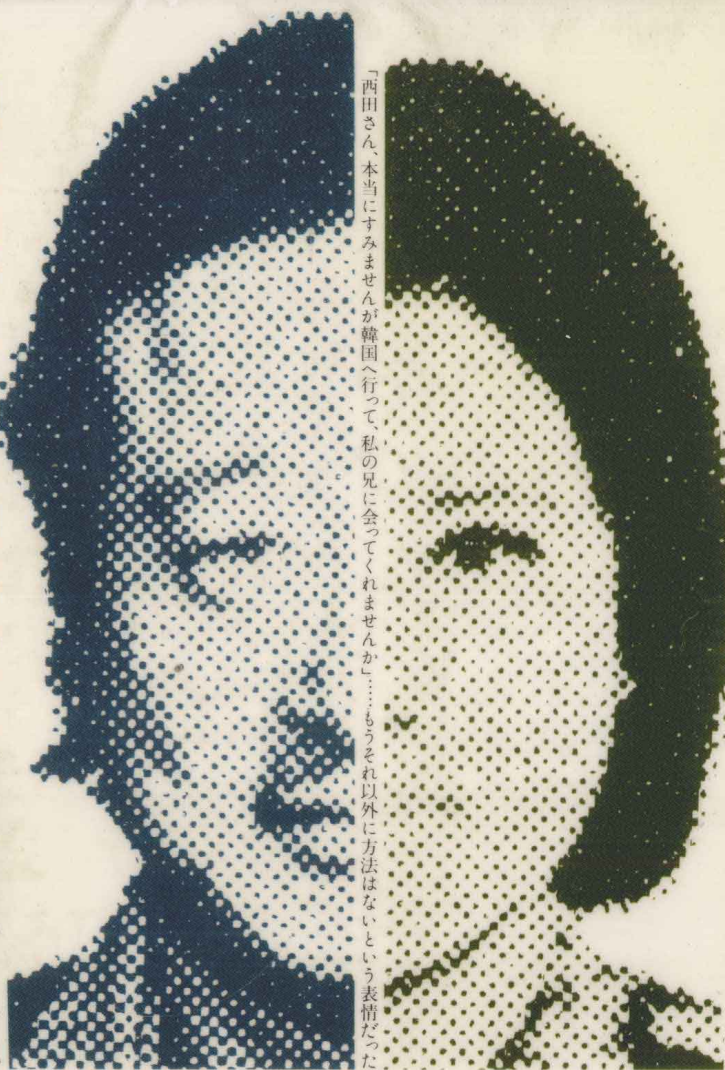
虚構

そのときだった
みんなの話に耳を傾けていた
申監督は、まるで思いつめた
ようにこう言ったのである。

の

「私が韓国へ帰って映画をつ
くるのは、もう絶望的だ。自
由に映画がつけれるなら、北
へ行ってもいいと思う……」

映像



「西田さん、本当にすみませんが韓国へ行つて、私の兄に会ってくれませんか」……もうそれ以外に方法はないという表情だった。

「韓国での謀略工作の一環として、日本人連絡工作員西田哲雄氏が二回にわたり韓
国に入国。崔さんらの家族と接触した……」私はこの記事を読んで、文字どおり、
あいた口がふさがらなかった。途方もないデッチ上げとデマゴギーの氾濫である。

申相玉・崔銀姫事件の真相

西田哲雄

申・崔両人の主張は、逃亡以後、ほとん
ど虚構か、事実の歪曲でしかない――

批評社

構

著者

西田哲雄

の

©西田哲雄 1988

映像

装幀者

吉村貞廣

初版第一刷

一九八八年八月二十八日

発行

初版第二刷

一九八八年十月十日

発行

発行所

批評社

東京都文京区本郷二一六一一五
電話 〇三七八一三二六三四四

印刷所

株式会社文昇堂

定価

一、四〇〇円

0030-88997-7189

製本所

越後堂

西田哲雄

一九四八年兵庫県姫路市生まれ

一九七三年早稲田大学商学部卒業

韓国民主化闘争の映画を撮りながら

現在「シネ・コリア」事務局長を務める

虚構の映像 西田哲雄
申相玉・崔銀姫事件の真相

批評社

虚構の映像
目次

目次

はじめに

8

第一章 謎の失踪事件

17

1 申相玉監督との出会い

2 ソウルへ飛んで

3 監視の目を恐れる人びと

4 「北へ行ってもいい」

5 二人の行方を案じて

第二章 朴政権の圧迫を逃れて

45

1 「二人は生きていたぞ!」

2 北朝鮮の援助で自由な映画制作

- 3 家族への手紙を託され
- 4 「弟はエゴイストです」

第三章 虚構と真実のはざままで

- 1 韓国安企部「北の拉致」と発表
- 2 崩れた南北対話
- 3 「北が与えたキャンバスに自由な絵」
- 4 劇映画『帰らざる密使』
- 5 モスクワ映画祭で

第四章 偽われる亡命劇

- 1 衝撃的などんでん返し
- 2 日本人記者の証言
- 3 「拉致」された人間が「最上の礼遇」?
- 4 あまりにも映画的な手記

第五章 背信と虚妄の迷路

- 1 黑白転倒の「拉致」説
- 2 「西独へ逃げ」むしかなかったんです
- 3 根も葉もない「監禁」説
- 4 動かしたい事実の数々
- 5 ねつ造された録音テープ

第六章 逃亡ドラマの虚と実

- 1 恩を仇で返した二人
- 2 最後の賭けは公金横領だった
- 3 米CIAのタクト
- 4 尹伊桑氏の証言

関連資料

175

関連年表

213

結びにかえて

230

はじめに

1

一九七七年の暮れ、私はふとした機縁から来日中の韓国の映画監督・申相玉氏シンサンオクと知り合いになった。彼が朴政権パクの圧迫と自らの不始末から窮地に追いこまれ、韓国からの亡命を画策していたところである。

翌年一月、前夫人であり女優である崔銀姫チュエウニさんが香港で行方不明となり、彼の身边も急に騒しくなった。彼は内縁の妻・呉樹美オスミさんと子供たちを国外へ脱出させようと、ソウルにいる実兄や甥に依頼の手紙を書いたが、その手紙を運んでくれそうな信頼のおける人間がいなかったため、私にそれを懇願した。

すでにKCIA（韓国中央情報部）からにらまれていた申監督であつたから、私はその依頼に一抹の不安を感じたが、ひとりの人間として彼の苦境を見るにしのびず、託された手紙や物品を持って何回か訪韓した。ところが同年七月、今度は所用で香港へ出かけたはずの彼が行方をくらまし、以来約五年間、ぶつつりと

消息を絶ってしまったのである。

その間、私たちに伝えられた噂は、K C I A の拉致・暗殺説、北朝鮮への亡命説などさまざまであった。しかし八三年十一月、突然、彼から連絡があり、彼が崔さんとともに北朝鮮の援助をうけ、映画制作に専念している事実が明らかとなった。

この朗報を私たちが喜んだのは言うまでもないが、翌八四年四月、K C I A の後身である韓国国家安全企画部（K N S P ・略称、安企部）は突如、「崔銀姫・申相玉拉北事件発表文」なるものを公表し、二人が「北朝鮮に拉致された」と主張したばかりか、何と、この私を一方的に「北の工作員」だと断定したのである。

これに対し、申・崔両人は記者会見やインタビューなどをつうじ、安企部の発表を全面的に否定したばかりでなく、「私たちは『北』があたえてくれたキャンバスに私たちの絵を描いた。だけど自由な作家であることに変わりはない」（『読売新聞』84年4月11日付）と明言した。

その後、彼らは私たちの協力も仰ぎながら映画『帰らざる密使』をはじめ、次々に劇映画を制作し、さまざまな話題を呼んだ。そのころ彼ら二人は、北朝鮮で「最上の礼遇」をうけていたという。

にもかかわらず、彼らは八六年三月、いかなる理由からか突如アメリカへ逃亡し、今度は一転して自ら「北の拉致・監禁」説を唱えはじめたのである。

これはあとでわかったことであるが、彼ら二人のアメリカ逃亡に深く関わったのは、「情報謀略の帝王」

と言われる米CIAと国務省当局であった。二人の逃亡ドラマが最初から謀略臭を強くただよわせていたのは、こうした仕掛人が舞台裏にひそんでいたからである。

私たちの驚きと疑惑は計り知れないものがあつたが、申・崔両人はそれをすっきりと釈明することもなく、その後、米CIAなどの庇護をうけながら、陰に陽に北朝鮮に対する非難・攻撃の言動をつづけていたようだ。ようだと書いたのは、少なくともその表舞台には立たなかつたからである。

こうして申・崔両人の言動は大きな疑惑につつまれたまま、私たち日本人にはいつしか忘れ去られようとしていた。私自身も後味の悪い思いを残して、いつかは事の真相が明らかになるだろうと、あえてそれを氣にとめないでいた。

ところが昨年十一月末、あの大韓航空（KAL）機失踪事件が発生し、その原因も機体の行方も不明な段階で韓国当局がそれを「北の犯行」と断定するや、申・崔両人は精力的にマスコミの舞台に登場し、「北の犯行」説をくり返したばかりか、「真由美も恩恵も平壤で見た」などと「証言」したのである。

かてて加えて、二人は自らが「北に拉致され監禁された」という体験談なるものをマスコミに発表し、まるで北朝鮮攻撃の最先頭に立ったかのようなのである。

当時、一部の心ない日本人によつて、在日朝鮮人女子生徒に対する理不尽な暴行事件が連続したとき、その痛ましいニュースを伝える日本のテレビに申・崔両人がしきりと登場し、大韓機失踪事件の「北の犯行」説と自らの「北の拉致・監禁」説をくり返し主張する姿を見て、私は正直のところ、腹の底からこみあげて

くる怒りを禁じ得なかった。

これでは彼ら二人も、罪のない在日朝鮮人女子生徒に対する暴行事件の共犯者ではないのか……。私は、許せないという思いでいっぱいだった。

2

周知のように、問題の大韓機が失踪してから、すでに八ヵ月以上が経過しているにもかかわらず、いまだに肝心の機体はおろか、乗員・乗客百十五名の行方も杳として知れない。

にもかかわらず、このミステリアスな「死体なき殺人事件」では、何一つ証拠もないまま、一方的に「犯人」が名指しされたばかりでなく、これまた一方的に北朝鮮に対し「制裁措置」まで加えられたのである。

この点に関して、評論家の室伏哲郎氏は、「こうした根本的な疑問、疑惑があるにもかかわらず、KAL機失踪事件は、韓国捜査当局が拉致した形の「真由美」の自白で演出、脚色された「真由美事件」にすりかえられ、「真由美」の「日本語教師の恩恵（ウネ）」と称する、事件の本質から遊離した枝葉末節の「ウネ拉致事件」に再度すりかえられた」（『朝鮮時報』88年2月15日付）と指摘した。

また、同じく評論家の中川信夫氏は、申・崔両人の登場と関連して、「KAL機事件はいつの間にか「真

由美』『恩恵』へと焦点が移り、次には『申相玉・崔銀姫』が焦点にされようとしている」（『疑惑の「真由美事件」あの大韓機はどこへ行った？』柘植書房刊）と衝いたのである。

すでに報じられたごとく、「真由美」金賢姫キンヒョニなる女性は真つ赤なニセモノであることが判明した（文光ブンコウ佑・朴明淳パクミョンスン著『謀略は暴かれた——KAL機失踪事件と「真由美」の謎——』エンタプライズ刊）。

こうして、「真由美」が「これは私」と指さした花束贈呈の主が、現に平壤に住む鄭姫善チョンヒソンさんだったことが明白になった以上、唯一「真由美」の“自白”なるもので成り立っていた「北の犯行」説は、音をたてて崩れ去ったと言ってよいだろう。

私が見るところ、このもつとも重大な事実の判明に対して、韓国の治安当局も、また「真由美は本物」と終始、安全部の発表を支持した『赤旗』紙も、世界を納得させるような反証を出してはいない。真相ばかりと当を得ない強弁をくり返しているだけである。

こうした状況の中で、申・崔両人はアメリカ、韓国、日本で今春、ほとんど同時期に自らの「北の拉致・監禁」説を柱とする膨大な量の手記なるものを刊行した。これが反北朝鮮キャンペーンのタイミングに合わせた、計画的な出版であったことは言うまでもあるまい。

この手記を一読して、私は正直のところ、申・崔両人の良心とその人間性を疑わざるを得なかった。それはイデオロギー上の問題からではなく、また、この手記の中に私や友人が頻繁に実名で登場しているからでもない。

この手記には、黒白転倒も甚だしい事実の歪曲がなされているだけでなく、人間の善意と道義を弊履のごとく投げ捨てながら、それを合理化し正当化する詭弁が苦もなく弄されているのである。

その、ほんの一例を次に見よう。申・崔兩人は自分の同胞ばかりでなく、多くの外国人にも多大な迷惑をかけているが、申監督はその点についてこう書いている。

：純粹な友情から親友（申自身のこと）を助けてやろうとして、誤解による汚名まで蒙るようになった日本人の親友K、米国の親友Hに対しても、済まないとの思いで心が痛んだ。金慶植と西田も、善意の被害者になった。

安全企画部（KNSP）の発表文には、KとHの本名が出されているが、わたしがこの手記で、本名に代えてイニシャルを用いたのは、事実彼らは北朝鮮の指令に従って動いたのではなく、純粹にわたしの頼みを聞いて、友情からそのような困難なことをしてくれたのに、結果的に誤解を受けるようになったためだ。（傍点、引用者。以下同じ）

このくだりを読んで、奇異に感じる人は少なくないであろう。なぜなら申監督は、私と金慶植氏キムキョンシクに対しでは「善意の被害者」だと言いながら本名を使い、「KとH」に対しては最後までイニシャルで通しているからである。ちなみに「K」とは、映画評論家の草壁久四郎氏のことであり、「H」とは、米国在住の、申

監督の同窓生・金寅煥氏（死亡）のことである。

彼はなぜ、このような奇妙な使い分けをしたのだろうか。「誤解による汚名」と言うなら、彼自身の懇願をうけて幾度も訪韓し、「北の工作員」という途方もないレッテルを貼られた私の立場をどう釈明するつもりだろうか。

単なる「汚名」だけではない。私は安企部の発表直後、警察庁から事情聴取をうけただけでなく、治安当局から執拗な監視と尾行をうけ、一部の右翼からは「国賊」呼ばわりする脅迫状まで突きつけられたのである。にもかかわらず、申監督が今回の手記で、私や金慶植氏にイニシャルを用いなかったのはなぜだろうか。私はこのような点にも、申・崔兩人の隠微でしただかな底意を感じるのである。

ともあれ、私は大韓機失踪事件によって彼らがマスコミに再登場し、膨大な手記を発表したことなどによって、いまから十余年前に逆のぼり、彼らの失踪事件とその間の経緯を改めて検証せざるを得なくなった。もちろん、それは私憤からではない。あくまでも現代史における虚構と背信の一ページを検証し、人間として真実を明らかにしたいがためである。

虚構の映像